

Title	高齢女性のコミュニケーションに関する研究：会話データに見られるグループ・アイデンティティの分析を中心に
Author(s)	梅本, 仁美
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/54314">http://hdl.handle.net/11094/54314</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## [6]

氏名	梅本仁美
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 23291 号
学位授与年月日	平成21年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	高齢女性のコミュニケーションに関する研究—会話データに見られるグループ・アイデンティティの分析を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 三牧 陽子 (副査) 教授 ジェリー・ヨコタ 准教授 森 祐司

## 論文内容の要旨

2008年9月15日に発表された総務省の推計によれば、10年前には2051万人であった65歳以上の高齢者の人口は今や2819万人にも達し、その比率は総人口の16.2%から22.1%へと推移している。このような人口高齢化率の増加に伴い、日本社会に占める高齢者の存在はこれからますます重要になってくると思われる。しかし実際には、現代の日本人が高齢者や老いに対して抱く意識や態度、イメージは必ずしも肯定的であるとは言い難い。

第1章においては、まず日本の高齢者の現状と人々が抱いている否定的な高齢者観について述べた。高齢者に対するこのような見方は日本社会の高齢者に対する軽視は学問の分野にも影響を与えている。残念なことに、これまでのところ新しい高齢者像を打ち立てるような研究は生まれていない。むしろ逆に高齢者に対するエイジズムを助長するような研究もなかには存在していると言わざるをえない。このような現状は医学や認知科学の分野に限らず、コミュニケーションに関する研究分野においても例外ではない。コミュニケーション研究において、これまで高齢者は研究対象とみなされないか、もしくは心身が衰えて周囲から庇護されるべき存在として扱われてきた。そのため研究の対象となる場合も、高齢者の加齢によるコミュニケーション能力の低下に焦点が当たってきた。しかしこのような研究が実際の高齢者のコミュニケーションを的確に記述しているかどうかは疑わしい。一般社会、および研究分野におけるこのような高齢者の位置づけを考えるにつけ、これまでの高齢者に対する否定的なステレオタイプを一掃するような新しい方向性を持った研究を行う必要があると言わざるを得ない。

したがって本研究においては、これまで明らかにされなかった高齢者のコミュニケーションの一面に光を当て、この分野における新たな道筋を作るために、以下のような目的のもとに分析を行った。

- 1) 実験的な設定ではない自然な会話データを分析することにより、高齢女性が友人との相互行為の場面において互いにどのようにコミュニケーションを行っているのかを明らかにする。
- 2) 「高齢者グループ」としての意識が高齢女性の友人同士の会話においてどのように表示されているのかを観察する。
- 3) 高齢女性の「女性グループ」としての側面に注目し、成人女性の友人同士の会話に見られるとされるスタイルが確認されるのかについて検証する。
- 4) これまで一般的に受け入れられてきた高齢者のコミュニケーション能力に対する否定的なステレオタイプを実際の会話データに基づいて検証する。

インフォーマントを高齢女性に限定したのは、現代の日本において高齢女性の占める比重が大きいう理由からである。高齢期を迎えた女性が生き生きと活動していることから、高齢者の主体的な生き方のヒントが高齢女性のライフスタイルから浮かび上がってくると考えたからである。またこれまでの年代においても重要視されてきた女性の「友人グループ」におけるコミュニケーションを分析したいと考えたからでもある。

続いて第2章では高齢者の定義を明らかにした。一般的には65歳以上が高齢者であるとされている。しかしこの65歳という基準は何によるものであろうか。この基準の根拠を、本章では欧米の社会保障制度を初めとする歴史的な流れを考察することによって明らかにした。そしてこの基準が恣意的に決められたものであり、人が高齢者を定義する根拠があいまいであることを述べた。また高齢者に関するステレオタイプについて、これまでの研究で明らかになった知見をまとめた。その後、このような高齢者の定義やステレオタイプが一般的にはどのように受け入れられているのかをアンケート調査により明らかにした。その結果、一般に高齢期が70歳から始まると考えている人が年齢性別を問わず最も多いことがわかった。アンケート結果からは先行研究に見られるような高齢者に対する明らかな差別的な意識は感じられなかった。しかし自分自身が高齢者のグループに入ることをよしとしない人がほとんどであることから、多くの人は年を取ることに否定的なイメージを持っていることがわかった。また、高齢男性と高齢女性の高齢期に対する生活スタイルが異なっていることが読み取れた。女性が高齢になってからも地域社会やサークルで生き生きと活動しているのに対し、男性の場合はその具体的な暮らしぶりが見えてこなかった。このことから、高齢男性と高齢女性を同じグループに属すると考えるのは早計であると言える。

第3章では、まず高齢者のコミュニケーションに関するこれまでの先行研究を整理した。残念ながら日本における高齢者のコミュニケーション研究はまだまだ遅れていると言わざるをえない。そのほとんどが高齢者の言語形式に焦点が当たっているものであり、実際の高齢者の会話カデータを質的に分析しているものは、寡聞にしてまだない。ここでは、アコモデーション理論の立場に立つ、若齢者との会話に表れた高齢者アイデンティティの研究について取り上げた。続いて、「女性グループ」としての高齢女性の会話スタイルに焦点を当てるため、言語とジェンダーに関する研究を概観した。次に第4章以降の質的分析を行うために本研究で扱う主要概念を紹介した。さらに分析を進めていく上で手だてとなる、理論的な枠組みについて述べた。最後に、会話データの分析対象であるインフォーマントについての情報をまとめた。インフォーマントの内訳は、70歳から80歳の女性9名と、40代の女性2名である。高齢女性のうち3人をキーパーソンとし、各々の友人との会話データを収集している。

第4章では、高齢女性の友人同士の会話データを、相互行為の社会言語学の枠組みに従って質的に分析した。ここでは、特に会話に見られた高齢者としてのグループ・アイデンティティに注目している。その結果、高齢女性が同年輩の女性との会話においても他世代の女性との会話においても高齢者としてのグループ・アイデンティティを表示し、それが時には仲間意識を強める道具として機能していることがわかった。しかしこのような高齢者アイデンティティは、常に均一であるわけではなく、コンテクストによって異なっている。また複数のアイデンティティが重層的に表示される場合も見られた。第2章のアンケート結果からは、男女問わず高齢者であるということ否定的に捉えていることがわかった。しかし会話データのインフォーマントからは、自分たちの日常やありようを否定的に捉えている様子はうかがえなかった。本研究のインフォーマントは年を取ることに抗い、加齢による変化をありのままに受け入れ、それを自分たち「高齢者グループ」に共通する特性と考えて適応していこうとしたり、また年齢を重ねたことによって人生が豊かになったと考えている様子がうかがえた。そしてこのような姿勢が同世代の友人とのコミュニケーションの場においても表れていた。

続く第5章では、同様に会話データの質的な分析を行ったが、ここでは主に「女性グループ」としての高齢女性に注目して分析を行っている。つまり成人女性の友人同士の相互行為において見られるとされる会話スタイルの特性が、高齢女性の会話にも見られるかどうかを中心に分析を行った。その結果、高齢女性の会話においてもオ

オーバーラップするスピーチ、協同して構成される発話や協力的なフロアなどの特徴が見られ、成人女性と同様な協力的な会話スタイルが採られていることが明らかになった。このように高齢女性は決して一方的に自分1人が話し続けるわけではなく、協力的な聞き手としてあいづちを打ちながら話し手に耳を傾け、また相互に協力し合って話題を作り上げていることから明らかになった。

最後に第6章においては、4章、5章とは視点を変えて、高齢女性の高齢者としてのコミュニケーション能力という側面に注目した。これまでの先行研究は高齢者の話し方に対して、冗長で自己中心的であるなどという否定的な見方をしてきた。言いよみや指示語の多用、短い言い切りの応答、音の脱落や変化も指摘されている。そこで本章では、はたして一般に言われているように高齢者の話し方が冗長で自己中心的であるのかを会話データを用いて検証した。ここで分析の項目として選んだのは、聞き取り能力、発話速度、TOT現象と指示語の使用状況、取り上げられている話題である。加齢によって聴力が衰えてしまうのは否定できない事実である。しかしこれを高齢者はコンテキストに対する高い理解力によって補っているということがこれまでの研究で明らかになっている。また発話速度については、インフォーマントの会話データから比較的長く続いている発話を抽出し、20代、40代女性の発話と、1秒間の拍の数を比較した。その結果、発話速度の差には年齢の違いよりも個人差が影響していることがわかった。さらにそこで話されている話題によっても発話速度が影響を受けていることも明らかになった。またデータには、TOT現象によって適切な語が思い浮かばないような場面も見受けられたが、これに対して参加者はそれほど理解の困難を感じていないようであった。また高齢者の会話には悲観的な話題が取り上げられるという傾向があるという先行研究の主張も、本研究の会話データには当てはまらなかった。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、急速に高齢化が進行している日本社会において、高齢者の加齢によるコミュニケーション能力の低下ばかりが目立ってきたことが高齢者や老いに対する否定的なステレオタイプを助長する結果となっているとの認識から、自立した生活を送る高齢女性の友人間にみられる自然なコミュニケーションデータを収集して質的に詳細に分析し、生き生きとしたコミュニケーションの実態を明らかにしたものである。

数十年にわたる高齢期を区別なく論じる従来多くみられる研究に対し、本研究では、高齢者の定義やステレオタイプの認識を明らかにするために各世代に対するアンケート調査を実施し、その結果、一般に高齢期が70歳から始まるとの認識が年齢性別を問わず最も多いことを確認した上で、高齢者のインフォーマントを70歳から80歳の女性に限定して会話データを収集している。相互行為の社会言語学の「参与の枠組み (participation framework)」「フレーム」「文脈化の手がかり (contextualization cues)」等の概念、「成員カテゴリー化装置」「カテゴリー随伴行動」「ポライトネス」「会話スタイルとジェンダー」等の理論と概念を用いた分析によって、従来の高齢者ステレオタイプを否定する様々な知見を得た。会話の中に頻繁に表示される高齢者グループ・アイデンティティの分析からは、加齢による変化を受け入れ、蓄積してきた豊富な経験を前向きに捉え、さらに仲間意識を強める道具として機能すること、会話スタイルの分析からは、オーバーラップするスピーチ、協同して構成される発話や協力的なフロアなど成人女性と同様な協力的な会話スタイルの特徴が見られること、また、取り上げられた話題の分析からも従来指摘されてきた悲観的な話題はみられなかったことなどである。一方、高齢になるほど頻発するTOT (tip-of-the-tongue) 現象の分析からは、適切な語が想起できない場合においても、種々の補足的な手段によって誤解を回避するとともに、聞き手もコンテキストの中で発話意図を理解しようと努めるため、指示語の多用等も必ずしも理解の妨げになっていないなど、若年層とは異なるコミュニケーションの様態も明らかになっている。

調査対象が自立した高齢者の中でも前向きに生活している層であったことが結果に反映していることは否めないが、従来の高齢者コミュニケーション研究にはない新規の調査対象および研究方法によって遂行された本研究は、今後さらに多様な高齢者の実態解明が必要とされる現代の高齢化社会において、高齢者コミュニケーション研究に道筋をつけた先駆的な研究として高く評価できる。

以上から、本論文は博士 (言語文化学) の学位論文として十分価値あるものと認める。